

フィリピンの音楽のよさや美しさを味わう音楽科学習指導

前マニラ日本人学校 教諭

福岡県福岡市立香椎第3中学校 教諭 岩 木 美詠子

キーワード：教科指導，現地理解教育

1. はじめに

これまでに私は、中学校音楽科教諭として感性を豊かにする音楽科学習指導の在り方について、研究をすすめてきた。派遣先においては、小学校3年から中学校3年までの音楽科学習指導を担当することになり、幸いこれまでの取り組みを継続できる環境にあった。

縁あって派遣されたフィリピン共和国は、七千百の島から構成され、文化・言語的に区分される百以上の民族から成り立っている多民族多文化国家である。それぞれの民族がそれぞれの文化をもっているが、細分化と不安定な情勢のため、フィリピンの音楽はアジアの音楽の中では、詳しく知られていない。

今思えば、私とフィリピンの音楽の接点は、日本ASEAN交流年の2003年にあった。サンフランシスコに住むフィリピン人の友達が、ミンダナオクリンタンアンサンプルのダンサーで、彼女とはこれまでに、サンフランシスコのお宅を訪問したり、国立民俗学博物館の招聘で、大阪と福岡で研究講演のために来日した際に会ったりしていた。この時の音楽を研究することになるとは、縁とは不思議なものである。

フィリピンで生活する子どもたちと共に、多彩な特色をもつフィリピンの音楽文化に触れることで、フィリピンの音楽のよさや美しさを味わいたい、子どもたちには、音楽の多様性や音楽文化の豊かさに気付き、フィリピンの人々や国を尊重する心をもつことができるようになって欲しい、フィリピンのことがさらに好きになって欲しい、と考え、本研究を行うこととした。

2. フィリピンの民族音楽

一部のアジアの国々は、歴史から、植民地化され、社会・文化に外部からの影響を大きく受けた。その結果、国によっては文化そのものが大きく変化した。フィリピンにおいても、スペインは徹底して現地の人々をキリスト教に改宗させ、その過程で、スペインやメキシコ起源の音楽・舞踊を奨励すると同時に、土着の音楽文化を絶滅に追いやった。その当時演奏されていた音楽は、スペインに最後まで抵抗しつづけたミンダナオ島・スールー島のイスラム教徒ヤルソン島山間部の少数民族によって、かろうじて現在に伝えられている。

現代のフィリピン音楽は、欧米の影響とスペイン統治時代のスペイン楽曲の影響を受けている。フィリピン島先住民族の音楽に、最初の変化を与えたのは、日本人や中国人であったというが、その後、400年の間、スペインの統治下に置かれ、スペイン音楽の影響を受けた。そのため、厳密な意味で、フィリピン独特の伝統音楽として現在までそのまま存続しているものが極めて少ない。

3. フィリピンの音楽の専門研究

(1) 研究先決定に至る経緯

音楽を専門的に個人研究としていくには、フィリピンの事情から、資料・施設面において限界があることがわかった。

そこで、音楽大学の民族音楽学講座の授業見学を考えた。見学先としては、歴史ある大学であること、民族音楽講座が充実しているようであったこと、フィリピン大学音楽学部が所属される先生が音楽学部長でおられたこと、

バヤニハンナショナルフォークダンスカンパニーの財団本部が大学内に設置されていたことなどから、フィリピン女子大学（共学）音楽学部を選び訪問した。民族音楽室の楽器の充実度と、専門性の高さに1回では調査を終えきれず、何度か足を運ぶことにした。そのうちに、教授から聴講生になってはどうかとすすめられ、毎週土曜日に通うことになった。

最後には、教授からどうせ通うなら大学生になってはどうかとすすめられ、大学受験をすることになった。私の現地教育事情等に関する調査・研究は、大学で本格的に行うこととなった。

(2) 大学入試について

フィリピンでは、フィリピン語と英語が公用語であるが、小学校の一部教科と高等学校以上の授業は英語で行われている。入試も英語で行われるため、留学生の受け入れも積極的である。希望としては、大学院に入学だったが、私の英語力の問題で、大学の先生の助言・判断から、学部生での受験となった。受験は一般入試で、卒業大学の成績・卒業証明（英文）に日本国大使館の奥書証明付きのものや、ビザやパスポートなどの証明、人物証明書等の提出書類が必要であった。揃えるだけでかなりの時間を要した。また、入学条件をクリアするために、数度の面接が科された。入試科目は、英語（読解、文法）、数学、知能検査で、学科テストと学部長面接の後、合格判定がなされた。

(3) 音楽学部フィリピン音楽専攻

私は主専攻の楽器をクリンタンに決めた。コング特有の響きと独自の音階が耳にやさしい。クラスメイトには特別奨学生として学んでいるカリンガ族（ルソン島コルディレラ地方）とマギンダナオ（ミンダナオ島）のクリンタン奏者の子女がいて刺激になる。大学は、西洋音楽を専攻している学生の方が断然多く、自国の音楽文化の研究や継承のための勉強をしている学生は少ない。



卒業演奏会の様子（写真右手が筆者）

大学の先生のお話は、フィリピン音楽界全域に渡り、音楽史や近代音楽で見聞きしたフィリピンの作曲家や作品が次々出てきて、興味深い。大学ではフィリピン音楽に関する科目のみを34単位修得した。

大学の先生方は、貴重な調査研究の成果を惜しげなく教えてくださった。そして、2年を終える時、プロの演奏家による特別レッスンを受け、卒業演奏会を行った。

(4) 現職音楽教員のためのワークショップ

フィリピン女子大学主催の5日間行われているワークショップにも参加した。フィリピンの先生方も日本と同じように教科研修や講習会を行っており、授業づくりの実践的講習は興味深かった。また、現地の先生方と情報交換をすることが出来楽しかった。参加されている先生方は熱心な先生方ばかりでフィリピン音楽についても、積極的に指導されているとのことだった。2日目は、私も講師として1枠依頼され日本でのリコーダーの指導の在り方について講話を行った。

4. 授業実践

大学で学んだことを基にして、子どもたちにフィリピン音楽の多様性や美しさを伝えたいと思い、フィリピンの音楽の教材化を行い実践した。すべてマニラ日本人学校の子どもたちはもちろん、日本の子どもたちにもアジアの音楽として教えたい豊かな音楽文化である。

実践例1「フィリピンの踊りの音楽を楽しもう」(小学部第4学年)計3時間/1年次7月実施

ティニクリンはティクリンという鳥の名前に由来し、鳥が草の茎や小枝の間を歩いたり、農夫がしかけた竹の罫を巧みによけて飛んだりする様を舞踊にしたものである。竹の竿の間を素早くしかも上手にステップしながら、鳥のかわいらしさと速さを表現する。

現地校との交流で行われるのは、歌の交流である。最も知られているフィリピンの民族音楽はルソン島のバンブーダンスのティニクリンであり、子どもたちにもなじみの深いものである。3拍子の拍の流れやフレーズを大切に、現地の子どもたちとフィリピン語と一緒に歌う。

・計画(3時間)

第1次 ティニクリンをフィリピン語で歌ったり、バンブーを飛んで3拍子のリズムを楽しんだりする。

・・・2時間

第2次 スペインの影響を受けた踊り(ココナツの踊り、あひるの踊り、キャンドルの踊りなど)を鑑賞する。

・・・1時間

実践例2「フィリピンの音風景で声の音楽をつくろう」(中学第1学年)計3時間/2年次7月実施

人は声によって気持ちを伝え、民族は声を文化の一つとして高めてきた。声は、人々の大切なコミュニケーション・ツールの一つであった。声は、人類に共通する普遍的なものであるとともに、時代や地域の音楽文化のあり方を表現するものである。

本題材では、フィリピンの音風景として、物売りの呼び声や言葉を音楽づくりのモチーフとした。フィリピンの作曲家が日本の音風景に関心をもったように、生徒が自己のフィリピンの音風景にイメージをふくらませながら、音素材を探ったり音を音楽へと構成したりすることが、感性の開発につながり価値がある。

・教材「静かさや～芭蕉の俳句による～」ホセ・マセダ(フィリピン作曲家)、街の物売りの声ビデオ:バロット(アヒルの羽化前のゆで卵)、タホ(豆腐とタピオカの黒蜜かけ)売り、バリンビン(竹楽器)

・計画(3時間)

第1次 フィリピンの音風景に目をむけ、音風景の考え方を生かした曲を鑑賞する。

・・・0.5時間

第2次 フィリピンの音素材を生かした声の音楽づくりをする。

・・・2.5時間

実践例3「南フィリピンの踊りシンキルを楽しもう」(小学部第5学年)計3時間/3年次12月実施

ミンダナオ島には、クリンタンアンサンプルを伴奏音楽にしたバンブーダンスシンキルがある。すました王妃と日傘を持つ侍女が、交差で4本打ち鳴らされる竹の竿を、何ごとも無いかのようにまたいで踊る。遅いリズムと早いリズムの大きく2つを演奏し、拍子感やリズム感を楽しんだ。



シンキルを演奏しステップを踏む児童

・計画(3時間)

第1次 ビデオでシンキルを鑑賞し、リズムの特徴を聴き取る。

・・・1時間

第2次 竹の打ち手、ステップ、楽器(クリンタン、アゴン、ダバカン)演奏に分かれて、シンキルのリズムを楽しむ

・・・2時間

実践例4「コルディレラ地方の音楽に親しもう」(小学部第6学年)計3時間/3年次11月実施

ルソン島北部のコルディレラ地方では、カリंगा族、イフガオ族、イバロイ族などの山間民族が独自の文化を守りつつ生活している。儀礼や祭りでは、竹楽器や平たい銅鑼を用いた音楽や踊りが披露されている。小学部6年生は、修学旅行でコルディレラ地方の拠点でもあるバギオを訪れるため、その機会にあわせて、修学旅行の事前学習としてコルディレラ地方のカリंगा族の演奏をビデオで鑑賞し、事後学習として、マーケットで購入したバリンビンの演奏を行った。

・計画(3時間)

- 第1次 カリंगा族の楽器(ガンサ(平たい銅鑼を手でたたく)、パロック(平たい銅鑼をバチでたたく)、トガトン(太竹筒)、バリンビン(スリット入り細筒)などの演奏を鑑賞する。・・・15時間
- 第2次 5つの異なる音階で追いかけるリズム(インターロック)を表現する。・・・15時間

実践例5「クリンタンアンサンブルを表現しよう」(中学部第3学年選択音楽)計17時間/3年次4~9月実施

フィリピン南部にはクリンタン音楽と呼ばれるゴング中心の打楽器アンサンブルがある。現在でもミンダナオ島やスルー諸島において、結婚式などの人生儀礼や娯楽のために演奏される。さらに、地域によっては、言語的メッセージを送る手段となったり、霊によって引き起こされた病気を治す、儀礼の伴奏音楽になったりしている。10月の校内文化発表会で、生徒が練習の成果を披露した。

・計画(17時間)

- 第1次 南フィリピンの音楽の多彩さに触れる。・・・1時間
- 第2次 クリンタンアンサンブルをする。曲種の違いによる地域や演奏の違いをとらえ、演奏する。・・・12時間
- 第3次 発表準備、リハーサル、本番の演奏「デュヨグ」「シロング」「トンキル」(マギンダナオ族)「ママヨグ」(マラナオ族)クリンタン、アゴン、ダバカン演奏を行う。・・・4時間

5. おわりに

二度の植民地支配を受けたフィリピンでは、自国の文化を守ることが難しい状況があった。日本では、明治以降、国をあげての西洋文化の摂取と戦後の民主主義とアメリカ文化の流入により、100年前の自国の音楽を知らないという音楽状況をつくってしまった。その両国共が、自国の音楽を守り継承していくため、今努力している。

この状況を受け、日本では、新しい学習指導要領(中学校音楽)器楽の指導について、指導上の必要に応じて世界の諸民族の楽器を適宜用いること、和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫することとなり、音楽文化についての理解を深めるよう改定された。

フィリピンでも、これまで大人たちは、民族ダンスは学校で習うが、民族音楽の勉強したこともないし、フィリピンの事情から鑑賞の機会も少ないため、フィリピンの音楽についてほとんど知らない状況であった。しかし近頃は、学校教育でのフィリピンの音楽の指導が行われており、教科書には小学校4~6年にフィリピンの民族音楽が掲載されている。研究機関で研究を進めていくこと、次の世代を担う子どもたちに学校教育として授業を通して継承していくことが大切である。

子どもたちが音楽の学習を通して多様な音楽に対する理解を深め、音楽に対して自分なりの意味を見いだしていくことが、次世代を担う子どもたちの自国や他国の文化の多様な価値を認める国際理解へとつながっていくと考えている。これら私の取り組みは、現地日本語新聞のマニラ新聞に2度掲載された。

これからも、アジアの音楽の一つとして、フィリピンの音楽を伝えていきたい。